

2008「地方の時代」映像祭応募作品解説書



製作・監督 大宮 直明

1. 作品の概要

- (1) タイトル おかぐら
- (2) 内容 千葉県は無形文化財に指定されている「水神社永代大御神楽^{すいじんじやえいだいおほみかぐら}」は、毎年2月に同県旭市^{あさひ}後草^{うしろくさ}の水神社に奉納される。演舞は13部からなり、800年以上の歴史を持つと言われる。神楽師は地元の20代の青年16人である。この作品は、神楽師の青年たちの稽古の様子と祭を中心に取材し、伝統文化を担う地方の青年たちの姿をテーマとしたものである。そこには、伝統を継承しなければならないという「気負い」はなかった。先輩は新人を厳しく温かく指導し、毎晩稽古と酒盛りを繰り返す。失敗やユーモラスな掛け合いが続き笑いが絶えない。ぎこちないながらも次第に打ち解けていく青年たちは、ごく自然に神楽を舞い、楽を奏でる。



- (3) 仕様 デジタルビデオ カラー ステレオ アスペクト比 16:9
約 58 分
- (4) スタッフ 製作・監督 大宮 直明
- (5) 製作協力 水神社氏子のみなさん
高梨芳松（当家）
日本刀研磨所
千葉県立東部図書館
- (6) 参考文献 嶋田孝（1979）「水神社と永代大御神楽」『海上町史研究 10』
財団法人千葉県史料研究財団（『千葉県の歴史史料編考古 3』
松谷みよ子「椿の湖」『松谷みよ子の本 9』

2. 登場人物



館林豊（大黒）

今回初めての参加。祭の半月前に初めて誘われた。椎名太一郎から大黒役を引き継ぐ。



椎名太一郎

最年長で仕切り役を務める。今回大黒を豊に引き継いで神楽師を卒業する。



角田優也（天手力男命）

豊とともに初参加。浪川洋平に指導を受ける。



浪川洋平

太一郎とともに今回で神楽師を卒業する。天手力男命を演じてきた。優也を指導する。



浪川健太（恵比寿）

「恵比寿大黒」の恵比寿を演じる。豊とコンビを組む。



浪川智博（猿田彦命）

浪川嘉平衛の教えを受けながら天狗の面をかぶる猿田彦命役を演じ、太鼓も務める。高上知久に太鼓を指導する。



江畑雅文（田神）

最も長時間かつ動きの激しい田神種蒔を演じる。



浪川嘉平衛

神楽世話人の一人。

浪川健策（天細女命） 浪川輝彦（八幡神、狐） 崎山博文（榊葉） 宮内弘樹（稻荷保食命） 平野勝久（種蒔） 乙女の命（小林稔） 浪川正浩（素盞鳴尊） 浪川愛加、古作瑛菜、崎山智未、遠藤舞、小川美幸、宮内麻純、加瀬彩乃、野口萌（浦安の舞） 小林三郎、浪川敏雄、高梨寛（神楽世話人） 神原靖夫（宮司）

3. 物語

毎年2月、千葉県旭市の水神社で古くから伝わる神楽が演じられる。^{さるだひこのみこと}猿田彦命や^{すきのおのみこと}素盞鳴尊など13の演舞が繰り広げられるこの神楽の起源は、鎌倉時代とも室町時代とも言われ、県の無形文化財に指定されている。神楽師は後草部落の16名の青年たち、年明けから神社で稽古を始めた。

今年初めて参加する青年が2人いた。館林豊は「大黒」を、角田優也は^{てぢからのおのみこと}「天手力男命」を演じることとなった。豊に舞を教えるのは去年まで「大黒」を演じてきた椎名太郎、優也には浪川洋平がつきっきりで教える。

大黒の独特の足さばきがなかなか様にならない豊に、太郎、洋平、そして「恵比寿」役の浪川健太が3人がかりで指導する。「おめえ、おがしいよ」と健太が言い、「いいね、いいね」と太郎が褒める。優也の天手力男命は口上によって舞う。床を棒で叩きつけるタイミングがなかなか合わない。

神楽世話人の一人浪川嘉平衛が練習ぶりを見に来た。最初に演じられる^{さるだひこのみこと}「猿田彦命」役の浪川智博に振り付けをする。と思うと、「^{がく}楽が全然違うから合わせらんねえどえー」と自ら笛をとった。

この地域に古くから伝わる伝説がある。椿の海という湖の由来である。

「昔、猿田彦命がこの地に一本の椿を植えた。これが8万8千年後に大きく育ち、花が咲くと天が真っ赤に染まったという。いつの頃からかここに魔王が棲みつき、恐ろしい熱病で人や家畜を苦しめた。これを見たタケミカズチとイワイヌシが魔王にいくさをしかけた。魔王は大椿を引き抜き海に放り投げこれに乗って逃げた。しぶきが椿の木の跡に溜まって湖が生まれた」後草の部落は椿の海のほとりにあった。

稽古は仕事が終わってから時には深夜まで及ぶ。と言っても、半分は酒盛りという状態だ。ストーブの上ではソーセージや焼き鳥がじゅうじゅうと音をたてている。神楽師は舞いから始め、徐々に楽を覚えていく。高上知久は智博から撥の持ち方を教わるがうまくいかない。智博もどう教えていいのかわからない。酒盛りしていた健太がすかさず大声で叫ぶ。

「パツンパツンって寸止めすったあよ。戻しが遅い。おめえパンチやってっぺえ、引きが遅かったら次のパンチが出せねえべよ！」

酒を飲み、先輩の話を聞く。10歳近く年の離れた青年たちが徐々に打ち解けていく。

椿の海の話には続きがある。

建久3年(1192年)海沿いの村飯岡から、椿の海のほとりのこの地に7軒の人たちが移住してきた。水害から村を守るために鎮守水神宮を奉祀した。主神は^{みずはのめのみこと}水波能売命。江戸時代に椿の海は干拓され、その後は雨乞いの神となった。神楽が始まったのは建久とも応永の頃とも言われている。

祭の一週間前、本番と同じ衣装に身を固め、「衣装付けの儀」が執り行われた。宮司の祝詞に続いて豊と優也は榊を神前に供える。が、その手つきはぎこちない。

智博は天狗の面をつけて真剣を手に、猿田彦命を演じた。終了後、宮司が言う。

「ずいぶん錆びちゃったなあ」

鋼に赤錆がところどころ浮いている。

最後の稽古は例年酒盛りで終わるといふ。この日も盛大にストーブレンジが活躍していた。そのとき豊が靴下を脱ぎだす。「あにやってっ」と驚く太郎。「一回だけ」と懇願する豊。洋平が「やりたいてっ」と助け舟を出す。

撥をとる太一郎がてきばきと指図する。優也は口上がまだうまく言えない。「我は—これ、天手力男なり」と、つい「命」を抜かしてしまうのだ。豊の「大黒」に続いて江畑雅文が「田神種蒔」を舞う。20分以上に及ぶ田神の舞を、江畑は息を切らしながらフルに練習する。2曲めが終わり扇子を仰ぐ江畑に太一郎が声をかける。

「おい、ビール飲んでこいや」

「いいんすか」

「おお、やっとけ！ だいたい、こんな江畑以外覚えねえど」

祭の準備も神楽師の仕事である。朝まだ暗いうちに境内に青年たちが集まる。10数メートルに及ぶ幟の支柱を本堂の縁の下から引き出し、門柱に固定するのだ。支柱の根元を数人で押さえ、上部に結わえたロープを三方から引いて立ち上げる。一本めが立つ頃にはすでに明るくなってきた。二本めを立てかけようとしたとき、バランスが崩れた。あわやと思った瞬間、柱はちょうど木の枝にひっかかって止まった。事なきを得てホッとする青年たち。

舞台が組み立てられ、祭の準備が整った。

当日は冷たい雨だった。祭は当家での演舞から始まる。和室3間に神楽師、世話人、宮司そして部落の老若男女がひしめく。智博の「猿田彦命」、稚児たちによる「浦安の舞」が演じられた。太鼓の傍らには高上の姿はない。そして江畑の「田神種蒔」、3曲の舞の後、観客に餅や菓子が投げられた。「ちょうだい！ ちょうだい！」と稚児たちが叫ぶ。

雨の中、当家の主人が天狗の面をかぶり白装束の神楽師が続く。水神社までの「お練り」だ。せっかくの舞台は使われず、神楽はお堂の中で演じられた。観客は10数人しかいない。

「猿田彦命」から始まり7番目が優也の出番。口上の時が来た。「我は—これ、」優也が声を出す。しかし、またしても「命」を抜かしてしまった。それでも優也は床を鳴らしながら踊りを続ける。

10番めは江畑が「田神」を演じた。狐とともに餅や菓子を振舞う。観客は増えたが、それでも30人程度しかいない。江畑の白い息が面の口から洩れる。

豊と健太による「恵比寿大黒」は11番め。まずベテラン健太がダイナミックに「恵比寿」を舞う。しなやかな竹の釣竿と扇を自在に操る。そこに下手から豊が登場する。足裁きは健太に比すべくもない。健太が振り出した釣り糸に優也が鯛をつけようとする。なかなかうまく啜えさせられない。見かねた嘉平衛が飛んできて助ける。豊が忘れたのか、太一郎が本物の鯛を、魚籠に入れる。

健太が退き豊一人の舞台となった。しばし魚籠を覗き込む豊、面で表情は見えない。ようやく豊は腰を上げ、再び踊りだした。右手には鯛を高々と挙げていた。それを舞台から放り投げた。

素盞鳴尊が真剣を一振りし、紙吹雪が舞った。神楽が終わった。

半年後、豊は振り返って語る。

「踊ってるときは次どうやるかってことしか考えていなかった」

「(参加して得たものは)地元の人らあと飲んでしゃべったりする機会、踊りから得たものは…ないですよええ」

そして淡々と、来年もやります、笛や太鼓をやるように…って言われましたと言う。

祭の後、錆びた刀は研ぎに出された。荒砥石で錆が落とされたあと、刀は小さな砥石と親指で舐めるように研がれていく。

(了)

4. 製作ノート - 伝統を受け継ぐ青年たちのユルさ -

地方に住む青年たちを対象にした映画を作りたいと思っていた。東京から28年ぶりに郷里に戻り、この辺の若者はいったい何をしているのだろうと関心をもったのである。

水神社の神楽師たちは20代と若い。世話人の浪川嘉平衛氏は、他の神楽は何十年もやっているベテランが多いが、水神社の神楽師は若いのが特徴であり短所でもあると語ってくれた。彼の眼には経験不足ゆえの未熟さが映るのである。

一年で一番寒い時期に行われるこのお祭は子供時代の私にとってとても楽しみなものであった。綿飴や焼きそば、お面の屋台が並び、人ごみの中を父に手を引いて連れられた。田神が投げる餅を友達と競って拾うのは大の楽しみだった。しかし年と共に人出が減り、5年前久々に訪れた「お神楽」は、寂しく閑散としていた。子供たちの姿も数えるほどだ。

以来、この神楽のことを調べ始めた。「樁の海」伝説と神楽の起源、人々の生活を支えている干潟八万石とが結びついていることを知った。と同時に、神楽を演じている若者たちを対象にしたいと思った。彼らは県の無形文化財という誇りをもって踊っているのだろうか、仕方なくやっているのではなかろうかなどと想像した。対象は決まったが、どんな映画になるかはわからなかった。

稽古の後は酒盛りとなる。そこでは年長の者がもっぱらしゃべり、年下の者たちは耳を傾ける。時には説教がましい口調になることもある。しかしそこに堅苦しい上下関係は見られない。無形文化財を守らなければならないんだという使命感は感じられない。しかし、嫌々というわけでもない。彼らの関係はあくまでもユルく、豊の言うように「話が来たからやろうと思った」のであり、踊る

ことも笛をふくことも自然な振る舞いなのかもしれない。そうだからこそこれまで続いてきているのであろう。

撮影中は彼らの「自然な振る舞い」を観察することに徹した。何かをするように仕向けることは避けた。そうしてしまっただけでは彼らのやりとりの味わい深さが消えてしまうのではないかと考えたからである。インタビューも同様に控えた。

1月下旬から祭の当日まで数日間に撮影したテープを見ると、そこには地元の若者たちの何気ない姿が写し取られていた。方言で話し、格好つけたところは一つもなく、ユーモアと厳しさが同居していた。編集しながらつい笑ってしまうこともしばしばだった。この「ユルさ」を伝えたいと思った。



その後、どうしても豊の声だけは収めたいと思い、半年も経った後に話を聞かせてもらった。「恵比寿はかっこいい、大黒はだめっすよ」という豊は、まるで友達に語るようにカメラにしゃべってくれた。

何かに秀でているわけではない。無形文化財を必死で保存しようとしているのでもない。何の特徴もない辺鄙な田舎で、古くから伝わるだけが取柄の神楽を演じる青年たち。彼らの肩肘張らない関係を楽しんでいただければ幸いである。

(製作・監督 大宮 直明)

5 . 演舞 (2007年2月4日撮影)



猿田彦命



天細女命



浦安の舞



三宝荒神



八幡神



天手力男命
(2008年2月3日)



稻荷保食命



田神



恵比寿大黒
(2008年2月3日)



乙女の命



素盞鳴尊